

ホームルーム活動

生徒主体のホームルーム活動で、 集団への参画意識や協働性を育む

「生徒の学校における基礎的な生活単位とも言つべきホームルーム集団を基盤として行われる」ホームルーム（以下、HR）活動。学校生活の全般にかかわる事柄を扱う、特別活動の中心となる教育活動であり、それらを通じて築いたHRの文化や生徒間の人間関係は、教育活動全般の土台となる。2020年度、1学年担任、2学年担任をそれぞれ務める教師に、どのようなねらいでHR活動を行い、活動を工夫しているのかを聞いた。

安心・安全な場づくりと、 寄り添う指導で、生徒を自走へと導く

北海道・市立札幌藻岩高校 1学年副主任・担任 石山智也

他者の多様な考えを伝え、 自身の考えを相対化させる

2019年度に、高校教師になって初めて卒業生を送り出した石山智也先生は、20年度、1学年の担任となった。4月の学級開きでは、自身が担当を務める「総合的な探究の時間」で重点を置く、①挑戦の連鎖を生む安心・安全の土壌、②協働を生む多様な土壌、③問う・問われる

の対話の土壌、④地域や社会に開かれた土壌の4点を、HR活動においても大切にしようと生徒に伝えた。好みも価値観も異なる生徒で構成されるHRで、各自が持つ個性を發揮し、学び合ってほしいという思いが石山先生にはある。

「昨年度送り出した卒業生は3年間担任を務めました、その時も学び合ひのできるクラスを目指していました。しかし、私が指導して、生

徒に学び合ひをさせていたというのが実際のところでした。そこで、今年度は、生徒が自ら学び合うような場づくりに徹し、活動自体は生徒に任せるようにしました」（石山先生）

コロナ禍の影響による臨時休業が明けた6月、担任裁量で活動できるLHRで、石山先生は、生徒からクラスの仲が深まる活動を募集。すると、「人狼ゲーム」（*1）が挙がり、初めてやる人も経験者も全員が楽



いしやま・ともや
教職歴5年。同校に赴任して5年目。1学年副主任・担任。「総合的な探究の時間」1学年担当。数学科。

北海道・市立札幌藻岩高校

- ◎卒業までに目指す資質・能力として、「ことばの力、考える力、想い浮かべる力、試そうとする力、やり抜く力」から成る「MOWASBS」を設定。「学び方の徹底指導」を行うことで、適切な学び方の土台の上に、「MOWASBS」を身につけ、社会の多様な場面で活躍できる人材の育成を図っている。
- ◎設立 1973（昭和48）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約320人（*2）
- ◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、小樽商科大、北海道教育大、北海道大、弘前大、岩手大、山形大などに76人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、北海道科学大、東京理科大、明治大、同志社大などに延べ417人が合格。
- ◎URL <https://www.moiwa-h.sapporo-c.ed.jp>

*1 村人チームと人狼チームに分かれて戦うゲーム。発言や態度を手がかりに、村人に紛れた人狼を推理していくため、自然とコミュニケーションが発生する。その特徴から、親睦を深めるツールとしても利用されている。 *2 2021年度新入生から1学年240人となる。



写真1 教室の掲示板上には、生徒が講演会を振り返って、考えを深められるように、石山先生が書いた講演会のメモなどを掲示している。

しめるチーム分けをして、生徒だけで活動を進めた。

「臨時休業を経験した生徒たちは、人と会って話せる大切さを強く感じていたでしょう。全員が協力してゲームを盛り上げ、『クラスの一人になれた気がした』といった声が多数上がりました」（石山先生）

石山先生は、進路講演会などが行われると、生徒が書いた講演会の振り返りの中から、クラスで共有したい内容や先生自身の気づきをSHRで話している。まずは自分の考えを持ち、その上で他者の多様な考えを知れば、生徒はそれと比較して自身の考えをメタ認知することができ、思考の深まりや視野の広がりにつながる。さらに、それによって、自分

とは違う考えでも受け止められるようになり、安心・安全な場がつけられていくと考えるからだ。

「教室の掲示板（写真1）を利用して、日頃から私の考えを発信し、それを聞いた生徒が自分の考えをアウトプットする場づくりを心がけています。教師側から生徒が発言しやすい雰囲気をつくれれば、生徒も『自分も発言していいんだ』と思え、HR活動において生徒同士の対話が生まれやすくなります」（石山先生）

「分からない」と言い合える 関係が学力向上の土台に

生活習慣の定着では、新たな取り組みを始めた。遅刻の多い生徒と面談をして遅刻の理由を探り、帰宅後から翌朝家を出るまでの行動をリスト化して、できたかどうかを生徒自身がチェック表に記入するというものだ。「何時に起きたの?」「何時です」「何時に寝たの?」「何時です」といった対話を通じて行動を自覚させ、遅刻しないためにはどうすればよいかを考えさせている。

「反省文を書かせても、生徒の心が

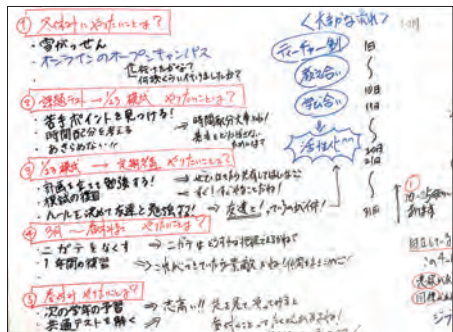


写真2 教室のホワイトボードには、今後の定期考査などの日程が書かれてあり、それに向けた生徒の意気込みや取り組みの内容が書き込まれている。

動いた気がしませんでした。そこで、生徒が行動を可視化する支援に徹したところ、生徒は起床時刻や家を出る時刻の遅さに気づき、遅刻しないための行動を自ら決めて実行し、遅刻をしなくなりました」（石山先生）

朝のチェック表の記入は、周りの生徒も見ている。すると、自分も生活習慣を正したいという生徒が出てきて、取り組みが広がっている。そうしたHR活動での安心・安全な場づくりは、教科学習の土台となると、石山先生は言う。

「学び合いを通じて『分からない』『教えてほしい』と言合える関係が築かれると、分からないことは恥ずかしいことではないといったマイルドセットができます。それは、授

業で理解できない点を放っておかずに質問する姿勢にもつながります」

そうした生徒の意識が顕著に表れたのが、冬季休業明けの課題テストを返却した日のSHRだった。テストの平均点が他クラスに比べて下がっていたため、石山先生は「どうして、こういう結果になったのだろう」と問いかけた。すると生徒から「学級閉鎖で学校に来られなかったからだ」といった意見が挙がった。

「実は12月に、2週間の学級閉鎖がありました。『各教科のプリントや解説動画があったよね?』と聞くと、『疑問点があっても、教室での授業とは違って、すぐには周りに質問できないので、勉強がしにくかった』といった回答が生徒から返ってきました。学び合いや疑問点を放っておかないことの大切さを、改めて実感したのでしよう。SHRの後、教室のホワイトボードに『ルールを決めて友達と勉強する』と書き込まれていました（写真2）」（石山先生）

2年生進級時には、クラス替えがある。石山先生は、「このクラスでの体験を基に、自らが次のクラスの核になり、新しい仲間と学び合うクラスを築こう」と生徒に呼びかけている。

クラスへの帰属意識を持たせる 生徒主体のHR活動で、自立した「人財」を育む

兵庫県立網干高校 2学年担任 石原 孟

学級開きから始まる生徒の 集団の一員としての自覚

HR活動の方針に「自他共に最幸にできる自立型人間の育成」を掲げる兵庫県立網干高校の石原孟先生は、生徒たちに、自分1人の幸せではなく、周りの幸せも願い、実現しようとする志を抱いてほしいと語る。

「学校教育の目的は、一人ひとりが替えの利かない『人財』の育成です。生きる力を高め、自ら人生を切り拓いていける勇気と実行力を生徒に育むことを目指しています」

同校の生徒は、穏やかで素直であり、人の話をよく聞く半面、受け身でおとなしい傾向がある。そうした生徒を自立型人間に導くようなHR活動を、石原先生は意識している。

「HR活動の年間35時間の授業時間として割りあてられているうち、担任裁量で活用できる6〜7時間で、協働する集団づくりを行う」と

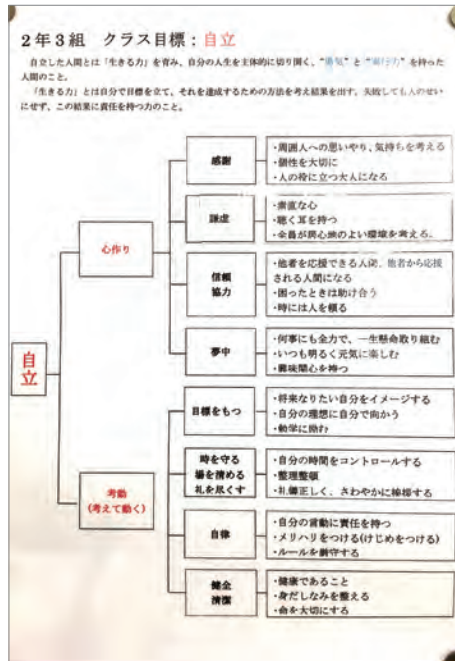


写真1 今年度受け持っている2学年のクラスでは、生徒たちが話し合い、「感謝」「謙虚」「信頼・協力」「夢中」「目標をもつ」「時を守る・場を清める・礼を尽くす」「自律」「健全・清潔」の8つをキーワードとしたクラス目標を設定した。目標が書かれたシートは教室に掲示し、さらにラミネート加工したシートを、生徒は各自の机の上に貼っている。

もに、普段から生徒主導によるクラス運営を進めています」

例えば、毎日のSHRでは、クラス委員長が進行役となり、副委員長や日直の生徒とともに連絡事項の伝達やプリントの配布などを行う。週1回のLHRも、クラス委員長が司会を務めて生徒のみで話し合う。

そのように、生徒が主体的に動くよう、学級開きでは、石原先生が冒頭紹介したHR活動の方針を伝え、毎週発行する学級通信において

も石原先生がクラスにかける期待を表明し、「自分たちがクラスをつくる」といった意識を生徒に浸透させている。また、クラスを主導できそうな生徒に、「クラス委員にならなにか」と個別に声をかけている。

「クラス委員が頑張る姿を見て、周りの生徒は自然と協力するようになります。学級開きから1か月も経てば、生徒だけでHR活動を行えるようになります」(石原先生)

クラス委員が決まると、クラス目



いしはら たけし
教職歴10年。同校に赴任して2年目。2学年担任。理科(生物)。

兵庫県立網干高校

- ◎ 姉妹校との交流を軸としたオーステリア研修、看護・保育の就業体験、地域行事への参加など、国際理解教育やキャリア教育などを活発に展開。2020年度の探究学習では、1・2年生が味噌の製造から販売までを体験し、働くことの意義を考えた。
- ◎ 設立 1979(昭和54)年
- ◎ 形態 全日制/普通科/共学
- ◎ 生徒数 1学年約160人
- ◎ 2020年度入試合格実績(現浪計) 国立大は、秋田大、山口大、徳島大、愛媛大、神戸市外国語大、兵庫県立大、下関市立大に7人が合格。私立大は、京都産業大、近畿大、関西学院大、神戸学院大などに延べ2328人が合格。
- ◎ URL <https://dmzcms.hyogo-c.ed.jp/abo-sh-hs/>

標をクラス全員で話し合っ立てる。今年度担任を務めている2学年のクラスでは、コロナ禍による臨時休業が明けた6月のHR活動で、目指すクラス像などを話し合うグループワークを行い、「感謝」「謙虚」など、8つの目標を掲げた(写真1)。そして、学期末や学校行事後には、8つの目標の到達度を10点満点で生徒各自が自己評価し、クラス全体の平均をリーダーチャートで示した。

「自己評価は、クラスを俯瞰して



写真2 週3回朝行われる国語・数学・英語の小テストで合格すると、それぞれ赤・青・黄のシールを、3教科すべてに合格すると、金色のシールを貼ることができる。自分たちの努力の軌跡をキラキラしたシールで表すことで、生徒の学習姿勢が前向きになる。

クラスの問題を見だし、その解決に向けて自分のできることを考えさせるために行っています。視野を広く持ち、集団の一員としての自覚を促すねらいがあります」（石原先生）

ほかにも、朝の小テストで合格点を獲得すると金色のシール（「黄金のシール」）を貼る活動（写真2）を行ったり、分散登校中はクラスメートに励ましのメッセージを贈り合う活動を行ったりと、工夫を凝らした活動を通じて、クラスの団結力や帰属意識の向上を図っている。

1つ上の役職の仕事を意識させ、先を見通す姿勢を育む

生徒が3年生になった時、希望進

路の実現に向けて自走できるための力の育成にも力を入れる。生徒は各自手帳を持ち、それに目標や予定を書き、いつまでに何をすべきかを考え、目標を達成したかどうかを振り返る。また、模擬試験の振り返りを行うHR活動では、志望校の入試から逆算して、時期ごとに自分がすべき学習を考えるよう促している。

「志望校合格に向けて頑張るのは、生徒自身です。3年生になるまでに自律的・計画的に学ぶ姿勢が身につくよう、低学年次から先を見据えた活動を行っています」（石原先生）

先を見通す姿勢は、普段のクラス運営でも生徒に意識させている。例えば、クラス委員長は担任に代わってHR活動の運営を、副委員長や各委員は委員長の仕事を、その他の生徒は各委員の仕事率先して行うといった具合に、自分の役職や立場よりも1つ上の仕事をしよう、生徒に伝えている。

そうした活動を地道に積み上げていくと、次第に生徒は集団の中で自分に何ができるのかを考え、行動する習慣を身につけていく。今年度のクラスの生徒は、担当を決めなくても、率先して黒板を消したり、プ

『ホームルーム通信』では、先生方の実践を基に、HR活動や生徒への接し方のポイントを紹介しています



ベネッセコーポレーション
『ホームルーム通信』
編集長
藤川恵史

多くの先生がクラス担任を経験されますが、HR活動などの進め方は先生個々に任されている学校が大半のようです。教育委員会が行う初任者研修などは教科指導が中心であるため、特に若手の先生方からクラス

運営に対する悩みをよく伺います。先輩のクラス運営を見て学ぶといった暗黙知の継承も、中堅の先生が少ない学校では難しい状況にあり、よい指導を言語化して引き継ぐことが課題であると捉えています。

そうした課題のお役に立てていただきたいと考え、『ホームルーム通信』を年5回発行しています。元気なクラスづくりのためのヒントとなるよう、担任を受け持つ先生のクラス運営の実践、面談などでの生徒への接し方のポイント、生徒の声かけに役立つデータの活用方法の3本立てでお届けしています。

全国の先生方を取材する中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、生徒主体のHR活動を試行錯誤されている状況が分かってきました。生徒一人ひとりが当事者意識を高めて、クラス全体や仲間になんかのように貢献できるのかを考え、行動を起こす経験は、社会で生きる力につながると考えています。生徒主体のHR活動の実現に向けて日々奮闘する先生方をつなげるコミュニティづくりも、今後、『ホームルーム通信』で支援したいと考えています。

Benesse High School Onlineでは、過去3年間の『ホームルーム通信』をご覧ください。
<http://www.bhso.ne.jp> トップページ>指導>担任>クラス担任先生の教室「ホームルーム通信」

ントを配つたりするようにになった。「自律的な集団をつくるには、教師がルールを守らせるよりも、集団への帰属意識が高まるような雰囲気や文化をつくり上げるのが効果的だと考えています」（石原先生）

クラスがまとまるに連れて、相手の目を見て挨拶する、授業に集中できていないクラスメートを注意する

など、生活態度も変わっていくと言。クラスの居心地がよく、自分を出すことや周囲とかわることをためらわない生徒が増えるのだ。

「生徒が大人になった時、自分がしたよい経験を次の世代にも伝えたいと思うような、30年後の生徒にも響く教育をしていくことが、私の目標です」（石原先生）